

平成24年度普及啓発講演会 長崎会場
谷本晃久 様「アイヌ文化と長崎～俵物・ラッコ・阿蘭陀通詞～」

開催日：平成24年6月23日（土）／開催場所：長崎市チトセピアホール

皆さんこんにちは。谷本と申します。お手元に受付で配られた封筒をお持ちかと思いますが、その中に「アイヌ文化と長崎」と書かれたA4のプリントが入っております。それにそってお話を進めさせていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

私、札幌からまいりましたが、ご紹介いただいたとおり札幌生まれで現在も札幌で勤めております。そうなのですが、実はご縁がございまして小学校、中学校とここ長崎の学校に通ってございました。その後北海道に戻ったわけです。今は江戸時代の北海道の歴史などを研究しておりますけれども、この長崎で、日々江戸時代のかおりに触れて育ったということが現在の力になっているところも多くございまして、北海道と長崎の両方で暮らした者としてこういった機会をいただいたということに感謝しております。

まずは江戸時代の長崎と北海道のつながり、共通性というお話しをしまして、その後、アイヌ文化とはどんな文化なのか、江戸時代にアイヌ文化はどのように花開いたのかというお話をさせていただきます。その後「俵物」「ラッコ」「阿蘭陀通詞」と、一見何の関係もないように思われるこれらが、長崎と北海道を結ぶたいへん重要な事柄であったことをお話しさせていただこうと思っております。

そこでまず、初めてアイヌ文化に接した長崎の地下者（じげもん）は誰か、つまり、江戸時代に長崎に住んでいた町人のなかで初めてアイヌ文化に触れたのは誰なのかということを考えてみたんですけれども、ひとつ考えられるのは阿蘭陀通詞ですね。後でお話ししますけれども、幕末に樺太までいき、確実にアイヌ文化に触れた人がおりまして、日記も残っています。しかし、それ以前に貿易に従事した商人が道南の松前を訪れていまして、調べてみますと、江戸時代、1741年（寛保元）の記録が残ってございました。寛保元年、長崎商人の松田善蔵（まつだぜんぞう）の手代、松田元助（もとすけ）の一行五人が松前にいっております。その目的はというと、中国へ輸出する産品を調達するために派遣されたというんですね。おそらく長崎の町人として松前にいったのはこの人たちが初めてだろうと思われまして。松田たちは昆布を調達するためにいったのですが、当時の松前にはアイヌの人たちもいました。記録によると武士の奉公人としてアイヌの人たちを雇っていたようなので、もしかすると長崎の松田さんが1741年にアイヌの人に出会ったかもしれない。松前で誰に出会ったのかということまではわかりませんが、北海道と長崎がそう浅い付き合いではなく、300年ほどのお付き合いの歴史があるのではないかなと思っています。このように北海道と長崎は遠く離れていますが、いくつかのご縁があるということをお話ししたいと思っております。

江戸時代における長崎と北海道の共通点は鎖国なんです。長崎は鎖国時代における日本の窓口ですよ。出島にはオランダ人がいて、唐人屋敷には中国人がいる。日常的に外国人と接していたわけですから。出島を含め、鎖国時代の日本には四つの窓口があったといわれます。そのうち三つまでがご当地九州です。出島のほかには、沖縄に通ずる鹿児島、朝鮮半島に通じる対馬があり、それら三つの窓口がよく取り上げられます。そして何を隠そう、もう一つの窓口は北側に開かれていた北海道の松前なんです。ここでアイヌの人たちと交

平成24年度普及啓発講演会 長崎会場
谷本晃久 様「アイヌ文化と長崎～俵物・ラッコ・阿蘭陀通詞～」

開催日：平成24年6月23日（土）／開催場所：長崎市チトセピアホール

易をする。アイヌの人たちとの交易といっても外国ではないんじゃないかと思われるかもしれませんが、実はアイヌの人たちは樺太を通じて中国と付き合っていました。それから18世紀以降になると北方領土の先の千島列島にロシアが現れます。そこでアイヌの人たちはロシアとも付き合うようになり、アイヌの人たちを通じて中国やロシアの物品が松前に集まってきます。長崎にも中国の生糸、絹織物がたくさん輸入されましたが、北海道からも絹織物が日本へ入ってくるんですね。それは「蝦夷錦」などと呼ばれて、京都の祇園祭の山車の飾りに使われていたりします。このように長崎と北海道には外に開かれた窓口という共通性がありました。ペリーが来てからは、箱館も長崎も浦賀などと同じように開港地となり、外国の領事などが駐在するようになります。江戸時代が終わった直後の一時期には、もともと幕府が直轄していた外交上重要な地域であったため、両方ともに「府」が置かれました。長崎が「長崎府」、北海道が「箱館府」になったんですね。

それから、思いもかけないところで仕返しをされてしまうという意味のことわざに、「江戸の敵を長崎で討つ」というのがありますよね。それに関連して、江戸時代の後期ですけれども、レザノフというロシアの使節が国交の樹立を求めて長崎にやって来ます。幕府は約一年間待たせたあげく、「ロシアとは仲良くできないのでおひきとりください」と、追い返してしまった。そこでレザノフは腹を立てるんです。幕府のいうとおりに長崎に来たのに帰れというのはひどいじゃないかということで、カムチャツカに帰る途中、樺太、稚内の近くの利尻島、北方領土の択捉島で、レザノフの部下が略奪したり日本の船を焼いたりしたんです。つまり、長崎の敵を樺太で討たれてしまったんですね。これはあまりいい連想ではなかったかもしれませんが、何を申し上げたいかといいますと、江戸時代の日本が外国とお付き合いをする場合、国際関係を結ぼうとする場合の主舞台となったのは長崎と北海道なんですね。長崎と北海道というのは江戸時代、鎖国時代の日本が外の世界とお付き合いするときの最前線の現場であったという共通性があるわけであります。

そして、長崎と北海道の一番の共通性といいたしましょうか、大きな接点というのは、長崎から中国に輸出していた国際商品、いわゆる俵物・諸色ですけれども、その中の昆布などはほとんどが北海道産です。それらを生産していた、漁獲していたのは誰なのかということとアイヌの人たちで、昆布や海鼠（ナマコ）や鮑（アワビ）をとっていたんです。そういう意味で長崎から中国へ輸出していた主力商品の一つである俵物・諸色を考えると、その背景にある北海道、そしてその生産者であるアイヌの人たちのことを考えるべきだと思うんです。そういう意味で「西の窓口」「北の窓口」としての長崎と北海道の接点は大きいだろうということを申し上げたかったわけです。

次に「近世アイヌの世界」についての話に入っていきます。日本列島を大きく見渡してみますと、いくつかの文化の伝統があることに気づきます。日本列島は大きく分けて三つの言語を話す人たちで形成されているといわれています。一つは北海道の松前あたりから沖縄までの地域で話されている日本語です。このうち、松前から鹿児島以南・七島灘までの地域で話されているのが日本語本土方言、長崎の方言も津軽の方言も含む、いわゆる日

平成24年度普及啓発講演会 長崎会場
谷本晃久 様「アイヌ文化と長崎～俵物・ラッコ・阿蘭陀通詞～」

開催日：平成24年6月23日（土）／開催場所：長崎市チトセピアホール

本語です。そして奄美よりも南は日本語琉球方言です。違った言語に聞こえますけれども文法は同じなんですね。それぞれその中にはたくさんの方言がありますが、大きく分けるとこの二つに分けられます。このうち日本語本土方言を話す人たちがつくった社会、文化が「和風文化」と呼ばれるものです。国家が「日本国」ですね。日本語琉球方言を話す人たちがつくったのが「沖縄文化」「琉球文化」。国家は「琉球国」、「琉球王朝」ですね。一方、北海道はアイヌ語ですが、日本語が二つに分かれるようにアイヌ語は三つに分かれます。「北海道方言」と「樺太方言」と「千島方言」で、それぞれに個性的な文化を紡いでいました。これらの文化の個性の違いを、図をご覧くださいながら確認したいと思います。この図のように、ちょん髷を結って和服を着ているようなのは和風文化。長崎の地下者もこのような格好をしていたんですね。江戸時代の沖縄の人たちは、この図に見えるようにちょん髷を結っていません。天保年間の小笠原諸島は今のハワイの辺りからの移民の人たちの世界だったんですね。ですからこの図のように洋服を着ています。欧米の文化、英語の話し手の文化が基層文化なんです。そして北海道のアイヌ文化では、この図のようにちょん髷も結っていないし和服も着ていません。「アットウシ」というオヒョウの木の内皮を紡いでつくった衣服を身につけて、和風文化とは異なった文化をもっていました。

この図に描かれているのは満洲文字なんです、この資料は樺太のアイヌの人たちに伝わった古文書なんです。樺太のアイヌの人たちが当時の清朝、当時の中国は清朝といいまして満洲人が皇帝を務めていた時代です。満洲文字で辞令がくだされている。樺太アイヌの人たちは清朝との関わりが深かったんですね。で、江戸時代には長崎にも中国から絹織物が入ってきますけれども、重要なことは長崎には主に布だったり生糸そのものだったのですが、アイヌの人たちは清朝からの辞令をもらいますから、役職に応じてくださった官服、いわゆる公務員の制服ですが、これがそのまま入ってきます。これを日本に売ってサハリンのアイヌの人たちは利益を得ます。この絵にある、ちょん髷を結った会津藩の侍に挨拶にしているアイヌの人が着ている服をみると、龍が刺繍された中国のコスチュームですから、これは自分の背景には大清帝国がついているんだぞということを侍にアピールしているようにも思われますね。つまり、樺太アイヌの背後には中国がいたということです。

次に千島列島のアイヌの人たちですが、19世紀の初めに幕府の役人が来て千島列島のアイヌの人たちのことを調べました。択捉よりも先が千島アイヌですけれども、カムチャツカ半島に近いところに住んでいたアイヌの人たちです。「あなたたち名前はなんていうんですか」と尋ねると、「私はヲロキセ（アレクセイ）といいます」、「私はマリアです」などと答えるんです。千島アイヌの方々にはロシアの名前、ハリストス正教の洗礼名ですね、それを名乗っていたわけですから。そして千島アイヌの人たちは、この図に描かれたようなものを持っています。これもご当地と縁がないわけではないのですが、十字架、聖母子に抱かれている赤ちゃんが描かれていますね。これはキリスト教の画題ですが隠れキリシタンではありません。幕府の役人から尋ねられると「ケレステ（キリスト）」と答えて隠そうとはしないんです。日本の鎖国はキリスト教の禁教とセットで、長崎では踏み絵をしているにも

平成24年度普及啓発講演会 長崎会場
谷本晃久 様「アイヌ文化と長崎～俵物・ラッコ・阿蘭陀通詞～」

開催日：平成24年6月23日（土）／開催場所：長崎市チトセビアホール

かかわらず、千島列島では洗礼名を名乗ってロシア正教に入信しているアイヌの人々がたくさんいたんです。幕府の役人は焦り、この人たちは「蝦夷」じゃない、つまりは日本の支配するアイヌじゃない、とみなそうとします。文化はアイヌ文化だけれども政治的には日本の手に余るから、以降北海道には来てはいけないとして、19世紀初頭に通交を遮断してしまいます。なのでそれ以降、千島アイヌの人々はロシアとの付き合いに特化し、独自の文化を磨いていくことになります。この図は1774年に書かれたロシア帝国の諸民族の本です。この中にたくさんの民族の絵が描かれていますが、その中の1枚にはドイツ語で「アイン・クリル」と書かれていて、フランス語で「クリリアン」と書かれています。これはクリル人ということで、ロシアではアイヌの人たちをロシア帝国に属するクリル人とみなしていたわけです。つまり、北海道のアイヌの文化とは一風異なった文化伝統が千島列島の北の方にはあった。サハリンのアイヌの人たちは日本ともお付き合いをしますけれども中国ともお付き合いをしていた。北海道のアイヌの人たちは主に日本との付き合いの中でアイヌ文化を磨いていった。この三つの個性があるということです。日本文化にも本土の文化と沖縄の文化があるのと同じように、アイヌ文化には三つの柱、個性があるということをご承知いただければと思います。

もう一つ申し上げなければならないのは、本州に住むアイヌの人たちについてです。東北地方の仙台や山形あたりまでの地域にアイヌ語地名が残っています。アイヌ語地名の研究者であります山田秀三先生は「アイヌ語族」という言葉をお使いですけれども、奈良時代や平安時代にはアイヌ語を使っていた人がいたのは間違いないのですが、江戸時代になりますと、そうした地域にアイヌの人たちがいた痕跡が見あたりません。だけれども津軽藩と南部藩、津軽半島と下北半島とその中間にある夏泊という半島までの地域に、18世紀まではアイヌの人たちが住んでいた。津軽藩、南部藩ではこの人たちのことを「狄」と書いて「えぞ」と呼んでいました。その後は「百姓」として位置付け直したので、これ以降本州ではアイヌ文化が見えなくなってしまうのですが、18世紀頃までは本州にもアイヌ文化があったと考えていいのではないかと思います。

その後19世紀以降、日本とロシアの間で国境が二転三転することになります。日露和親条約締結（1854年）のときに国後島と択捉島までが日本、択捉島の先にあるウルップ島からロシアと決めたのは、先ほどいった千島アイヌと北海道アイヌの通交が遮断された線なのでそこは追認なんですけれども、サハリンに関しては国境を決めなかったんです。その後、明治時代になり日本はダイナミックなことをしまして、樺太千島交換条約（1875年）を結んで樺太と千島を交換してしまいます。千島列島は日本領、樺太はロシア領にしましょうという条約を結んだときに、千島のアイヌの人たちはロシア語ができてキリスト教信者であるから、国境地域に住まわせておくとスパイになるんじゃないかと明治政府は勘ぐって、根室半島の少し先の色丹島に強制移住させます。樺太の南側に居たアイヌの人たちは稚内に移住させられ、最終的には札幌の隣に位置する江別市の対雁（ついしかり）に強制移住させられます。その後、日本が日露戦争に勝ち、ポーツマス条約（1905年）により

平成24年度普及啓発講演会 長崎会場
谷本晃久 様「アイヌ文化と長崎～俵物・ラッコ・阿蘭陀通詞～」

開催日：平成24年6月23日（土）／開催場所：長崎市チトセピアホール

樺太の南側が日本に返ってきたのでアイヌの人たちは樺太に帰りました。そして1945年8月15日に先の大戦が終わりました。8月9日、長崎に原爆が落とされて日本が敗戦し、長崎の方々はいへんご苦労されたわけですが、サハリンや色丹島にいたアイヌの方々もたいへんご苦労されました。樺太・千島から北海道方面への、いわゆる“引き揚げ”を経験されたのです。現在も北海道には、樺太アイヌの伝統文化をつないでいくための活動をされている方がおられますが、千島列島のアイヌの方々、色丹島に強制移住させられたアイヌの方々が1945年から北海道に引き揚げてこられて以降、千島アイヌの伝統文化を伝えている方が現在では一人もいなくなりました。千島アイヌに関してはその伝統文化をこの地球上から永久に奪ってしまったという歴史を日本国家が持っていることを自覚する必要があるんじゃないかと思います。

ちょっとシビアな話になってしまって申し訳なかったのですが、こうしたことを認識しておくことは大切です。しかし、だからといってアイヌ文化のマイナス面だけを強調するのも適切ではないと思います。先ほど皆さんホールで触れられた展示品、あるいはこれらご覧になる踊りや歌、これらはアイヌ文化にとってとても辛い時代があったにもかかわらず、豊かに文化を紡ぎ磨いてきたことを示しているわけで、こうした側面も忘れてはいけないのではないかと思います。ここまでがアイヌ文化の概要といいますか、アイヌ文化には三つの個性があるということを皆さんにお示しさせていただきました。ここからは具体的にアイヌ文化と長崎に関するお話をさせていただきます。

まず、アイヌ文化と長崎を考える際に忘れてはいけない、避けては通れないのが、先ほどから申し上げておりますように、長崎から中国へ江戸時代に輸出した貿易品の生産者としてのアイヌの人たちの姿であります。現在でも北海道の稚内や利尻島の海鼠は、最高級品として中国に輸出されています。長崎の皆さんにお話しするのは釈迦に説法ですけれども、江戸時代における貿易の初期の頃には、日本は主に金や銀を輸出していました。世界の銀の三分の一を日本が生産していた時期があり、中国はそれを輸入していました。オランダは日本から銀を買って中国に転売していました。オランダ船というのは中国との中間貿易といいますか、自国の産品だけではなく中国の産品も多数運んでいたんです。17世紀にはそのような貿易が行われていたのですが、どんどん輸出していると日本から金や銀がなくなって困ってしまうので銅にシフトしていきます。それもいずれはなくなり、日本から貴金属が出ていってしまうと国内経済にとってよろしくないということで、新井白石などが考えたのが俵物です。つまり水産物を輸出して中国の産品を輸入することを考えたわけです。そこで、日本中から海鼠、鮑、鱧鱈（フカヒレ）などを集めて輸出するわけです。北海道も産地の一つであり、アイヌの人たちがそれらの生産者だったわけです。この図に描かれているように、アワビは干し鮑に加工するところまでをアイヌの人たちが生業としてやっていたわけです。貝をとってくるのはお父さんで、水揚げした貝を加工する、殻をはずして茹でて干す、それをするのがお母さん。現在でもどこかの浜でやっているような風景ですけれども、こうして干し鮑が作られて長崎の俵物役所がそれを集荷していた。俵

平成24年度普及啓発講演会 長崎会場
谷本晃久 様「アイヌ文化と長崎～俵物・ラッコ・阿蘭陀通詞～」

開催日：平成24年6月23日（土）／開催場所：長崎市チトセピアホール

物のほかに「諸色」といって他の水産物も輸出していますけれども、その中のメインは昆布です。この図のように、これらを探っているのもアイヌの人々です。ただし、昆布は輸出するだけでなく日本の市場でも流通します。薩摩藩は大坂の市場で昆布を大量に買って沖縄に送ります。そして琉球王国の船で中国に輸出しているんです。だから中国の史料には「琉球産の昆布」という記述がでてきます。沖縄で昆布がとれるはずがないんですけれども、これは薩摩藩の巧妙な外貨獲得策ですね。沖縄から中国に行く船は年に数回、または数年に一度と決まっていますから、それまで「囲い昆布」といいまして、昆布を保管しておくんですが、ちょっと悪くなってしまったりしたものが沖縄の市場に流通します。なので、今でも沖縄には昆布を使った料理があるんですね。これはこうした薩摩藩による政策のなごりですが、その昆布をとっていたのはアイヌの人たちだったわけです。

諸色の中にはラッコ皮もあります。ラッコ皮はとても高級で毛の密度が世界一濃いそうですが、日本近海でラッコがとれるのは千島列島だけです。つまり、道東・南千島方面の北海道アイヌの人々や千島アイヌの人たちのとったものが日本で流通していたということなんです。実は、ロシアはラッコの皮を求めて南下し千島アイヌの人たちに洗礼を受けさせて、千島アイヌの人たちから税としてラッコを徴収していたんですね。ロシアの人たちがラッコを集めてどうしたのかというと、二ヶ所売るところがありました。一つは中国の宮廷です。チャイナドレスのうえからはおるコートに高級なラッコ皮を使います。もう一つはヨーロッパの宮廷です。エリザベス一世が白いラッコ皮だけで仕立てた襟巻をつけた絵が残っています。ヨーロッパでも高級品として高く売れたので、ロシアはそれを求めて千島までやってきたのです。

はなしを長崎に戻します。1711年には中国に1枚しか出していないんですが、1776年には1,420枚のラッコ皮が長崎の港から中国に唐船で運ばれています。当時の長崎の俵物役所による仕入価格は15枚で100両です。これはけっこうな高値ですから高級な毛皮として売買されているということです。このように、中国の船には先ほど申し上げましたアイヌの人たちが生産した海鼠や鮑あるいは昆布やラッコ皮が積載されて輸出されていた。つまり、積みまれている長崎からの輸出品の中にはアイヌの人たちによって生産された産物があったということを是非お話しさせていただきたかったところがございます。

長崎の俵物役所が独占的に海鼠と鮑、場合によってはラッコ皮、そして昆布を調達して中国に売っていた、輸出していたということでございます。そしてここで得られた中国との貿易での利潤は概ね長崎奉行を通じて幕府が一人占めしてしまいますけれども、その一部は「かまど銀」と称して長崎の地下者の方々にも配分されます。それが長崎経済の活性化につながるわけですが、それらを支えていた要因の一つがアイヌの人たちが生産した俵物・諸色だったということになります。

それでは江戸時代の輸出海産物、俵物・諸色に占める北海道産品のシェアはどの程度だったのかといいますと、18世紀後半の長崎からの輸出総額は13万両ほどですけれども、そのうちの35%が俵物、25%が諸色です。その諸色のうち80%が昆布で、その昆布生産のほ

平成24年度普及啓発講演会 長崎会場
谷本晃久 様「アイヌ文化と長崎～俵物・ラッコ・阿蘭陀通詞～」

開催日：平成24年6月23日（土）／開催場所：長崎市チトセピアホール

ほぼ100%が北海道産です。一方、俵物35%のうち北海道がどのくらいかという、いろいろなデータがあるんですけども、煎海鼠は20%、干鮑は0.2%です。ほかには1782年のデータですと、煎海鼠は31万斤のうち松前蝦夷地産は12万斤ですから3分の1となります。また、干鮑を4万斤出していた時代もあるようです。このように、時代によって様々なデータがあるのですが、長崎から出ていった俵物、昆布などの多くの品が北海道産だった、つまりはアイヌの人々が生産したものだった、ということです。では具体的にアイヌの人たちはどうやって煎海鼠をとっていたのか、というお話しをしたいと思います。北海道の宗谷地方を例にお話ししますが、1792年の全国の煎海鼠出荷高38万斤のうち3万7500斤が宗谷でとられていました。宗谷での海鼠漁には、宗谷から網走までのアイヌの人たちが参入してきます。300艘の漁船と400人のアイヌの男女が宗谷に集まって海鼠をとっていたという記録がございます。アイヌの人々が宗谷の日本商人へ交易に出す際には、煎海鼠500粒で米8升というレートがありました。長崎の俵物役所ではこの浜値の3倍で買っていましたので、これを集約している日本の場所請負商人が儲かっていたんです。長崎の俵物役所ではそれをさらに高値で中国に売っていたわけです。

宗谷では、アイヌの人たちが日本商人の会所に煎海鼠を持ってきて「アブラシヤケ」といえば清酒を渡し、「タンパコ」といえば煙草を渡し、「ヤヤカン」といえば耳輪を渡す。交易の現場ではアイヌ語と日本語が入り乱れていたんです。海鼠漁が終わったら儀礼をしてお別れをしますが、それを「オムシャ」といいます。被下物（くだされもの）や盃事（さかづきごと）などのあとに酒宴と踊りがあったようで、そこではトゥキやイクパスイが用いられていたという記録が残っています。このイクパスイにはアイヌの伝統的な美しい紋様が彫られていて、中には漆がほどこされたものもあります。こうしたことが海鼠漁のあとにあったということです。その正式な儀礼の後にはお酒が振る舞われて踊りがある。本日この後に公演される踊りは、江戸時代から受け継がれてきた伝統的な文化だということです。

また交易の様子を表した絵画として、アイヌの少年が俵物を計量する天秤の目盛りを興味津々に見ている絵が残されています。この絵は大英博物館の所蔵するもので、わたくしの先生である佐々木利和先生が紹介されているものです。アイヌの人たちは無文字社会だといわれていて、確かに積極的に文字を使っていたわけではありませんが、子供が目盛りに興味を持って見ているんです。俵物諸色の集荷の現場は、アイヌの人たちが日本の文化に触れる場でもあったということです。江戸時代にはアイヌ文化も日本文化も双方向性をもっていて、北海道には独自のアイヌ文化があったんですけども、明治以降になって豊かなアイヌ文化が日本の同化政策によって否定され貶められていったというのはとても残念なことだと思います。

最後になりますけれども、長崎阿蘭陀通詞がみたアイヌ文化について、名村五八郎元度（なむらごはちろうもとのり）（1826～1876）という人についてお話しします。五八郎は長崎生まれ長崎育ちで、日本初の英和辞典の編纂に参加し、日米和親条約の翻訳をし、日米

平成24年度普及啓発講演会 長崎会場
谷本晃久 様「アイヌ文化と長崎～俵物・ラッコ・阿蘭陀通詞～」

開催日：平成24年6月23日（土）／開催場所：長崎市チトセピアホール

修好通商条約の批准の通訳官としてワシントンに行くなど、たいへんに活躍した人です。この人は樺太にも行っていますし、箱館に3年間勤務していました。長崎の地下者として北海道と深く縁を結んだ人の一人ではないかなと思っています。1854年、安政元年の日露和親条約締結に際し樺太との国境が問題となり、ロシア側と現地で国境の相談をしなければならなくなったのですが、このときの両国の共通語はオランダ語でした。そこで白羽の矢がたったのが日米和親条約の翻訳交渉で神奈川に出張していた名村五八郎だったんです。樺太行きの辞令をもらった五八郎は、この図に示しましたように1854年に松前から日本海側を通過してサハリンまで、帰りはサハリンから苫小牧を経由して箱館へ戻りました。これでやっと長崎に帰れるのかと思いきや「3年間箱館で英語の教授をするように」ということになり箱館で初めて英語を教えたのです。五八郎は樺太往復の道中にアイヌの人たちに接していて、例えば安政元年4月22日に岩内で「アイヌの人たちが四五十人で櫓を掻いている。そのうち女性が二人いて赤い襟を付けた筒袖を着ていた」と日記に記しています。それから古宇（ふるう）では「アイヌの女性四五人が薪を背負って運上家に来た。みんな耳環を付けている。耳環には俗にいうカラフト青玉が垂れている」と日記に書いていて、これはこの図のような「ニンカリ」、ピアスのことですね。このニンカリにはアイヌの人たちが樺太での交易で中国から得ていた青玉が付いていた。彼はこうしたものを見えています。日付と時代がわかる記録としてとても重要ですね。

ただ、五八郎は長崎の人なので長崎の基準で物事を考え、みるものですから、アイヌの家屋をみて「アイヌの人たちの家は長崎の和風住宅に比べると全て背が低い」というような感想を述べています。やはり長崎を基準にすることによって、やや上から目線というような見方が抜けなかったかもしれません。五八郎はアメリカにも行っていますが、アメリカから帰ってくる時に大西洋を渡って、当時はスエズ運河がなかったのでアフリカを回って帰ってきます。現在のアンゴラ共和国の首都ルアンダですけれども、ここで先住民の家屋をみた同行者の玉虫という人が「これらの家は粗悪で日本のアイヌの家と似ていて見るにたらない。これはたぶん土人の家ではないか。だけれども、高いところにはポルトガルの官舎、官吏の家があって大変壮麗である。いっぽう、先住民は山麓に家を構えて住んでいた」と書いています。つまり、アンゴラ先住民の文化と北海道のアイヌの文化とはまったく異なるにもかかわらず、この二つを同じように劣ったものとみてしまっているんです。無意識のうちに和風文化や欧米の文化と比較して、先住民の文化を等しく下に見る、貶める視線になってしまっているのではないかと。私たちが世界の先住民の文化をみたり、アイヌの文化をみたりするときに、知らず知らずのうちに陥ってしまっている視線と同じなのではないかと思うんです。これは個々人の心の中の問題ではありますが、もしそうしたことがあるとすれば、それを自覚するところから始めなければならないということを、わたくしは学生に話したりもしています。

最後に「おわりに」というところですが、出島や唐人屋敷があり、鎖国下にもかかわらず異文化人と日常的に交流していた江戸時代の長崎と、和風文化をもった人びととアイヌ

平成24年度普及啓発講演会 長崎会場
谷本晃久 様「アイヌ文化と長崎～俵物・ラッコ・阿蘭陀通詞～」

開催日：平成24年6月23日（土）／開催場所：長崎市チトセピアホール

文化をもった人びととが併存して形成された江戸時代の北海道の社会には、意外な共通性を見いだせるのではないかと、思うのです。アイヌ文化というのは日本列島の固有文化の一つであり、かつ、和風文化の伝統からみたならば最も身近な異文化であるはずですが。1982年、わたくしも当時長崎におりましたものですからよく覚えているのですが、あの大水害があった年に、長崎へマザー・テレサが来ましたよね。マザー・テレサは、「大切なことは、遠くにある人や大きなことではなく、目の前にある人に対して愛をもって接することだ」ということをいったんです。つまりこれは示唆的で、国際交流や異文化理解のためには、遠くの世界を知ること大切ですが、まずは日本におけるアイヌ文化を知ることから始めるべきではないかと私は考えています。今日のおはなしが、アイヌ文化の過去における問題点と未来における展望について、身近なご当地の歴史や生活と関連付けながら考えていただく機会としていただけたならば幸いと思っております。これでお話を閉じさせていただきます。ご清聴いただき誠にありがとうございました。